第15回国際言語学者会議に出席して

水野　光晴

第15回国際言語学者会議の開会式は、平成４年８月10日午前８時半からカナダで最古の伝統を誇るケベック市のラバル大学アルバート・ルッソー講堂に於て、厳かな雰囲気のもとに行われた。つづいて９時半から12時半まで一定のテーマにもとづいて総会が行われた。今回の総会のテーマは、初日が「絶滅に瀕する言語」について、E．M．ユーレンベック氏の司会により、N．ドリアン、K．ヘイル、C．クレイグ及びM．クラウツ諸氏が講演し、幾つかの提言がなされた。２日目からは「現代言語学における理論的立場」と題するテーマで３日間にわたって討議が行われた。このテーマで、11日に講演したE．ハチコーヴァ氏は、これまでの言語学上の諸理論を体系的に比較検討し、統合することの必要性を提案された。また、W．ハートル氏は統合論と意味論の関係について提案し、「文法は意味とは別個の自立的なものであるべきか否かという議論があるが、文法を意味とは無関係なものとする立場は、文法を規則に縛られた行動とする見解を人々にうえつけることになった。しかし、文法は意味を代表し表現する手段であるとする立場に立てば、SyntaxとSemanticsは互に接近し、言語は意味的に動機づけられたシステムであり、意味を表現する活動としてより現実的なものになるであろう」と述べた。このような見解は、筆者のように文法を研究する者にとって、今後の研究の励みとなり、新しい展望を与えるものであった。

昼食をはさんで午後からは、会場を本部ビルに移して展示発表と研究発表とが並行して午後５時頃まで行われた。筆者は11日に「固有名詞に関する認識論的研究」というテーマで、13日には「ポールロワイアル文法の言語学的意義」というテーマでそれぞれ研究発表を行った。参加者から二，三の熱心な質問を受け、これまで筆者が参加した国際学会のうちで最も充実したものになった。つづいて午後５時から９時までの４時間は、９つの会場に分かれてパネル・ディスカッションが行われた。筆者はこのうち特に意味論や統語論関係のものを選んで参加した。

12日の水曜日は休会で、幾つかのコンベンション・ツアーが企画されていた。筆者もそのうちの一つに参加し、ケベックの郊外のオルレアン島の寺院やダム、自然の風物などを見学して回った。とりわけ、雪国を思わせる家の構造、白亜の教会、教会の墓地内の死体安置場、路傍の美しいフラワー・バスケット等々、彼等の故郷ノルマンディー特有の風情を愉しんだ。

閉会式は14日午後４時半より、アルバート・ルッソー講堂で約１時間にわたって行われた。会長のR．H、ロビンスにつづいて、ヴィクトリア・フロムキン、ジョン・ヒューソン氏等の講演が行われた。今大会の議論の主潮は、構造主義との訣別、生成文法に対する反省が強く、それにひきかえ認知意味論的色彩、社会言語学的観点からあらゆる言語的要素を統合する必要性が前面に打ち出されていたようである。

その夜７時から会場をアッパー・タウンのシャトー・フロンテナックに移して、最後の晩餐会がもたれた。このホテルはセント・ローレンス河の河岸の崖の上にそびえるケベックシティーの象徴で、天を突くような青銅色の屋根、幾つもの丸い小搭からなっている。とりわけ、夜空に浮かぶシャトー・フロンテナックのたたずまいは河岸の街路灯のイルミネーションと調和して印象的であった。

今大会は連日晴天に恵まれ、約50ケ国から七千五百名余が参加したが、この人数は東京大会の際の参加者の約半数であった。これは、交通上の不便、東欧諸国の経済、政治情勢不安から参加者の大量キャンセルが続出したためであろう。今回の出張を通して、アメリカ言語学の重鎮であるビクトリア・フロムキン氏や、冠詞論の碩学ジョン・ヒューソン氏をはじめ、日本から出席されたジョン・デキキス氏御夫妻、神戸市外大の高原氏、大阪女子大の前田氏、東京農工大の橋本氏など内外の多くの方と面識を得ることが出来て感謝している。